

## 「使徒的生活」を求めて——11・12世紀の隠修士運動

桑原直己

### 【1】はじめに

11世紀から12世紀にかけて西欧キリスト教世界は「改革の時代」にあった。この改革は一般には「グレゴリウス改革」と呼ばれ、聖職売買の禁止や司祭独身制の徹底などを通して聖職者の墮落を正す一方、いわゆる「叙任権闘争」を通して教会が世俗権力からの自由を獲得しようとした運動として知られている。従来理解では、この改革はその呼び名が示すごとく、教皇主導による教会聖職者のあり方についての改革とする見方が強かった。しかし20世紀後半以降の研究では新たな視点が展開し、「イタリア・フランスを中心として西欧各地に現れた多数の隠修士たちの存在が注目されるようになった。ラ・グランド・シャルトルーズ修道院をはじめ、イタリアのカマルドリ修道院、ヴァロンブローサ修道院などはすでに代表的な隠修士修道院として知られていたが、シトー会やプレモントレ会、巡回説教を行う修道者や、異端、民衆宗教運動などが「隠修士運動」との関わりの中で理解されつつある\*1」。言うまでもなく、こうした宗教現象は、来るべきドミニコ会、フランシスコ会などの「托鉢修道会」が登場する背景をなすものであり、初代教会における「使徒的生活」に倣い、これに回帰することを指導理念とする動きであった。

この小論は、そうした11・12世紀の宗教的動向のそれぞれに「隠修士運動」への志向がいかん反映しており、またそこに「使徒的生活」という指導理念がどのように働いているかを明らかにすることを目的としている。

### 【2】ベネディクトゥス型修道制と「隠修士」

#### (一) 修道士と「使徒的生活」

修道制の歴史は隠修士に始まる。すなわち、3世紀後半エジプトでキリスト教的修道制を創始したとされるパウロスやアントニオス(Antonios, 251頃-356年)は独居生活を営む隠修士であった。やがて同じエジプトで修道生活を始めたパコミオス(Pachomios, 292/294-346年)は、独居に伴う生活上の不便と精神的な危険に対応すべく、修道士たちが共同生活を営む共住修道院という生活形態を創始した。その後共住修道院は小アジアの地で、カッパドキア教父の一人バシレイオス(Basileios, 330頃-379年)によって教養ある知識人の共同体としてさらなる発展の歩みを開始する。しかし、バシレイオス以降も共住制が独居の隠修士を完全に駆逐したわけではなく、むしろ共住生活を予備段階として、より完全な修道生活として隠修士の生活を志向する、という伝統は、特に東方キリスト教世界において存続し、今日でも、修道院が少し離れた場所に隠修士の庵を擁するという形態を、たとえばアトスなどに見ることができる。

しかし、隠修士の伝統は東方キリスト教世界だけに限られたものではない。修道生活の西欧的な形態は、6世紀にヌルシアのベネディクトゥス(Benedictus, 480頃-547年頃)の筆になるとされる『戒律』において確立する。ベネディクトゥスの『戒律』は、基本的には共住修道生活を念頭に置いているが、隠修士の生活の可能性を認めるのみならず、これに高い価値を置いている。『戒律』の第1章では「修道士 monachi」の4つの種類が枚挙されている\*2。

第一に挙げられる共住修道士 coenobitae は修道院に住み、戒律と修道院長の下で仕える。

第二の分類に属する隠遁者、すなわち隠修士 anachoritae は、修道生活に入った当初の熱誠の段階を越え、修道院における長期の修練を経ている。多くの同僚の助けによって悪魔と戦うことを学び、鍛練を重ねた後に兄弟たちを後にし、砂漠での孤独な戦いに向かう彼らは、いまや神以外の誰からの助けもなく、独り、肉体と思念の悪徳と戦うことができる。

第三の分類に属す嫌悪すべき独修者 sarabitaе は「籠の中で試された黄金」(『箴言』27:21)のようにではなく、戒律によって試されておらず、経験の教えを欠き、鉛のように軟弱である。彼らに牧者はなく、二人あるいは三人、ときに単独で、自分たちの群れのあいだで暮らし、主の群れと住むことをしない。彼らにとり欲望の充足こそ、その法である。そこでなにごとでも心に思い浮かびあるいは望むところは聖と称し、その意に合わないものは禁じられているとみなす。

第四の分類に属するものは放浪者 girovagum と呼ばれ、各地の放浪に生涯を過ごし、三日あるいは四日その地の修道院で客として滞在し、常に路上にあり、定住することを知らない。もろもろの我欲と飲食の誘惑の奴隷である彼らは、すべての点で独修者に劣る。

以上から明らかなおと、ベネディクトゥスによれば「隠修士」とは、修道院長と『戒律』のもとでの共住生活による長年の修練を経た後に、より高度の修行段階に入る者を意味していた。つまりベネディクトゥスは、隠修士に対して東方修道制と共通する評価を与えていたことを確認することができる。しかし、同時に彼は「独修者 sarabitaе」を共住生活からの脱落者として非難し、さらには「放浪者 girovagum」に至ってはその「独修者」にすら劣る、と断じている点に注意しておこう。

上に引いた修道士の分類は、実はヨハネ・カッシアヌス(Johannes Cassianus, 360頃-430/35年)の『師父たちの問答集』に従ったものである。ベネディクトゥスは、『戒律』末尾の第73章で修道生活のさらなる完成を望む者のために『師父たちの問答集』を読むことを勧めている。この書物の中でカッシアヌスは、修道制の起源を使徒的生活に求めるとともに、隠修士の生活を修道生活の最高形態とみなす「古典的理論」を展開している。それは『師父たちの問答集』の第18巻\*3において、東方修道制の指導者たちを歴訪したカッシアヌスと友人ゲルマヌスがピアモン修道院長から受けた講話として描かれている。ヴァイケールの要約によれば\*4、それは概ね次のような展開をとる。

もともと、教会にいるすべての人々のために、『使徒言行録』が記述している共同生活、

つまり「使徒的生活」を使徒たちが確立していた。そうした生活形態がアレクサンドリアを含めて教会全体に行き渡った。ところが聖パウロはそのすべてを揺るがすような要素を導入した。彼は、アレクサンドリアのユダヤ人とは違い、キリスト教成立当時の深遠な生活を引き受けるだけの準備ができていない異教徒たちには、エルサレムの使徒会議（『使徒言行録』15:5-29）と呼ばれる有名な会議で決められた四つの禁則だけを課す、と認めさせた。そのため、その後、どんな信者も異教徒に認められたこの種の生活を送ってよい、と考えられるようになった。したがって、もはや初期のようにすべてを放棄する必要はなくなった。そこで、教会全体に初期教会における生活より墮落した生活形態が広がり、ついには共同生活が放棄されることになった。しかし、それを望まない者たちもいた。それが修道士となった。以下にそのようにして修道士が出現したくだりのみ引用しよう。

「ところが一方、使徒時代の熱情を宿しつづけた人々も少なくありませんでした。この人々は彼らの昔の完徳を忘れずに、自分の町からも、……中略……人々からも遠ざかり、市外の場所やもっと離れたところに赴いて、使徒たちによって、教会のすべての信者のために定められた事柄を個人的に実践しはじめました。この人々が、彼らの独身で孤独な厳しい生活から、独り住む人 *monachi*（修道士）と呼ばれるようになりました。ついで彼ら仲間の共同生活から、彼ら自身は共住修道士 *coenobitae*、彼らの小屋や住まいが共住修道院 *coenobium* と呼ばれたのです。ですからこの人々だけが唯一で最古の種類の修道士であって、時代的に最も古いのみならず、恩寵の点でも第一位を占め、パウロス師やアントニオス師の時代まで変わることなく続いてきたのでした\*<sup>5</sup>。」

「そして、これら豊饒な根ともいうべき完徳者たちのなかから、隠修士という花も実ものびてきたのです。私どもの知るところでは、この修道生活 *professio*（召命）の創始者は、先程名前をあげた聖パウロスと聖アントニオスでした。この人たちが孤独の地への隠遁を求めたのは、ある種の弱気とか忍耐不足によるのではなく、至高の完徳と神の観想を熱望したからだったのです。このように、あなたがたに先程お話した修道生活 *disciplina* からもう一つの完全な修道生活が出てきたのでした\*<sup>6</sup>。」

つまり、カッシアヌスーベネディクトゥスの伝統において、「修道士」は『使徒言行録』が記述している「すべてを放棄した」、つまり私有財産を放棄した共同生活という意味における「使徒的生活」を継承するものであり、「隠修士」は一層の孤独、祈り、禁欲を通して「より高度の観想」を求める、という意味での「完全な修道生活」とされていたわけである。

ヴィケールが指摘する通り\*<sup>7</sup>、無論今日の我々から見ればこのカッシアヌスによる叙述は史実に反している。しかし、『師父たちの問答集』を何度も読みかえしていた修道士たちは、修道生活が「使徒的生活」に連続する生き方であることを確信し、さらには修道生活の最高形態としての隠修士の生活に対する憧憬は彼らの意識の底に伏流のごとく流れ続けていたに違いない。

## (二) ベネディクトゥス型修道制における「隠修士運動」

### (a) ベネディクトゥス型修道制の定着とクリュニー修道院

カロリング時代にベネディクトゥス的な修道制は定着する。ただし、その際ベネディクトゥス型修道院は、王国の政策のもとで未開の地への宣教の拠点としての役割を担い、しばしば「王立修道院」などの形で、カロリング王国すなわち世俗世界と密接な関係を持って発展した。さらには、修道院自体が寄進された土地の「領主」となった。

続く10・11世紀にはカロリング朝の衰退にともなう無政府状態の結果、教会は分裂教皇の出現、聖職売買と聖職者の妻帯といった頹廢の危機にさらされた。そうした中、909-10年に創立されたクリュニー修道院は教会改革の担い手となる。クリュニーが改革的な修道院とされるのは、修道院が貴族の支配と司教の監督からの完全な自由（免属）を手にする契機となったからである。まず、従来のベネディクトゥス型修道制においては、各修道院はそれぞれの院長のもとに独立していたのであるが、クリュニー修道院の初代院長ベルノー（Bernó, 850頃-927年、在任910-27年）が複数の修道院の院長を兼任したことがきっかけで修道院連合、すなわち史上最初の「修道会」という形態が成立した。すなわち「分院」体制に基づいて中央集権的な組織を形成する一方で、修道院長選挙における無制限の自由を保証した。また、特に教皇の地位が再び強化されてからは、修道院の法的請求権を教皇に委ねることによって、聖俗の地方権力に対する上述の「免属」を手にしたのである。

しかしながら、クリュニーの人々は『戒律』が求める度合いを遥かに超えて典礼を偏重した。壮麗な典礼のもとで勉強などの活動、特に肉体労働が空洞化し、その豪華で貴族化した生活様式は、本稿の主題である11世紀の隠修士運動にとっては批判的となる。

### (b) ベネディクトゥス型修道制の枠内における「隠修士運動」

11世紀には、ベネディクトゥスの『戒律』とこれにもとづく修道制がその最盛期にあった。にもかかわらず、この時期ベネディクトゥス的な伝統的修道パラダイムではもはや満足せず、より高度の修徳修行を志向する人々が出現した。

岸ちづ子は11・12世紀における宗教的諸現象に対する研究史を顧みて、「『使徒的生活』・「原始教会」は、専ら聖堂参事会員の各種改革運動や巡歴説教者また俗信徒の運動を鼓舞した理念として論じられはするものの」、シトー会<sup>\*8</sup>をはじめとする「共修型観想型修道院の枠内に落ち着くこととなった修道士の改革・刷新運動に関しては、あまり考察されてこなかった」と指摘する<sup>\*9</sup>。その上で、我々も上に参照した『師父たちの問答集』からベネディクト修道士にとっての「使徒的生活」の意味を明らかにしようとしている。

その結果、ベネディクトゥス型共住修道制における「使徒的生活」ないし「隠修士」への志向が意味するところは「ベネディクトゥス戒律のより厳格な遵守によって、彼らが知っているかぎりでの修道制の原点、共住制をまもりつつ、修道制の目標である観想生活を」実現することにあつたとし、その具体的な形態を三種類に分類している<sup>\*10</sup>。すなわち

(1) 「共住修道院を中心にして、例外的に隠修士に必要な自由と孤独の場を保証する、ベネディクト修道院型」。これは『戒律』そのものが隠修士の可能性を認めていることの帰結である。

(2)「隠修士の孤独を保証する個室の集合体として修道院を構想し、ミサその他の共同行事をミニマムにするカルトゥジア<sup>\*11</sup>型」。

(3)「共住制に例外を認めず、共住団体内外の静寂・団体としての世俗からの離脱・集団聖務の削減など、修道士をして内面に沈潜させる仕掛けづくり、環境整備を通じて、隠修生活の実感や手ごたえを保証するシトー型」。

このような人々は、隠修士たることの本質を「独住」ということではなく、むしろ「ベネディクトゥス戒律の、より厳格・完全な遵守」に求め、しかもそのことを「戒律に規定されているあれこれの諸規定を厳守するということよりも、修道生活のゴールとしての隠修目標、すなわち観想生活へと修道士を導く装置」とすることによって、ベネディクトゥス型の共住修道院という枠内での隠修士の生活の実現を目指したのであった。彼らに共通する点は、ベネディクトゥス型の修道制がクリュニーのような形で展開することに対する批判であり、孤独に祈る場を確保し、清貧の徹底を目指すことにあった。

### (三) 11・12世紀における隠修士の出現

西方キリスト教世界にも古くから隠修士の伝統は存在していた。早くはアンブロシウス (Ambrosius, 339頃-97年) が、イタリア沿岸に点在する島々に隠修士集落があったと証言していると言う<sup>\*12</sup>。また、中世初期には、西欧の修道制の中でもさまざまな形での隠修士的な生活が試みられたことは諸家が指摘する通りである。

こうした中世初期の隠修制は散発的なものであったが、11世紀の西欧には広範囲にわたって隠修士運動が展開した。11世紀は、ベネディクトゥスの『戒律』とこれにもとづく修道制の最盛期であった。にもかかわらず、この時期に噴出した隠修士運動は、ベネディクトゥス的な伝統的修道パラダイムではもはや満足せず、より高度の修徳修行を志向する人々が出現したことを意味している。11世紀の中葉から12世紀の中葉までの約1世紀は、しばしば「共住修道制の危機」の時代とさえ呼ばれてきた。この時代の隠修士たちの志向を特徴づけるものは、独居生活への回帰と清貧への憧れである。

そうした傾向の一つの表現形態は、修道士が大修道院長のような地位を避ける、という風潮である。当時の隠修士の中には、司教や大修道院長になりうるような人物が、地位と名声を捨てて隠修士生活を模索し遍歴するようになった者がいた。そうした隠修士が司教となったり修道院を創立したりすることもあったが、なかには放浪修道者として遍歴生活のまま一生を送るものもあった、このような遍歴は従来の隠修士にはほとんど見られない新しい特徴であった。それは一つには、個人としての観想生活を追求することへの欲求によるものであり、また特に当時のベネディクト会系修道院の「世俗性」、たとえばその有する広大な「領地」の管理の任務に対する忌避感によるものと考えられる。また、もう一つの表現形態としては、より俗世から離れた生活を求める傾向が出現した。ベネディクト会系修道院の日課は、生活の細部に至るまで規定していたため、たとえば共同の祈りの時間を超えて一人で祈ったり、より厳しい苦行を自らに課したいと思う修道士たちの熱意によって妨げである場合もあった。そうした傾向の延長線上に、11世紀末に各地で、特にフランス西部で展開したいわゆる「隠修士運動」が位置づくことになる。この時期、多くの

人々が独居生活の場を求め、未開拓の森林地帯に入っていた。

彼らに共通して言えることは、富裕化してゆくベネディクト会系修道院の方向とは逆に、文字通りの清貧を実践し、労働によって自らの生活を支えつつ、さらに貧者への施しを行っていた点である。また、クリュニーなどでの壮麗な典礼とは異なり、きわめて簡素な祈りの生活を送っていた。

### 【3】 律修参事会の成立と「使徒的生活」

#### (一) 聖堂参事会の歴史

「律修参事会 *canonici regulares*」とは、修道（律修）生活を送る聖職者の共同体（聖堂参事会）、すなわち「司牧活動と修道的靈性」とが結合した共同体を意味する。

アウグスティヌス(Augustinus, 354-430年)やその先駆者たちに見られるように、4世紀には司教を中心に司牧活動に携わる司祭たちが営む司教座聖堂での共同生活が存在していた。これが(司教座)聖堂参事会の実質的な起源と言える。用語としての「聖堂参事会員 *canonici*」という言葉は、6世紀から使われはじめ、7世紀に頻繁に見られるようになる。当初この語は「教会法典に登録された聖職者、教会の聖職者リストに載っている聖職者」一般を意味していた。彼らは6世紀末から7世紀初頭にかけて、経済上ならびに宗教上の動機によって、大聖堂のそばに集まり、共同体をなすようになっていた<sup>\*13</sup>。その後の歴史において、聖堂参事会を組織化するための二段階の試みがなされた。

まず第一段階として、メッツの司教クロデガング(Chrodegang de Metz, 715頃-66年)が、754年頃自らの司教座に属する聖職者たちに向けて作成した規則が挙げられる<sup>\*14</sup>。この規則は「司教座聖堂参事会の身分 *ordo canonicus*」と称される団体における最初の規則となった。この規則は聖職者のためのものである。基本的には典礼生活の促進を目的としているが、注目すべきなのはこの規則を採用する聖職者に対して一定の共同生活を要求している点である。すなわち、それぞれの聖職者は自分の家を所有し、また教会から一時的に得た用益権を保持することもできるが<sup>\*15</sup>、寝食は共にしなければならない<sup>\*16</sup>、とされる。クロデガングは、彼らがさらに一步を進め、一切の私的所有権を放棄し、使徒たちやエルサレムの最初の共同体のように「使徒的生活」を送ることを勧告している<sup>\*17</sup>。しかし、各自の私有財産をもつことが許されていた点で修道生活とは異なっており、またこの規則は全ての聖職者を拘束するものではなかった。

第二段階は、カロリング時代になって817年のアーヘン教会会議で公布された「教会の規律に従った」生活と「参事会の職務 *canonica professio*」に義務づけられた人すべてを対象とする規則である。この規則は、内容的には先のクロデガングの規則をほぼ継承するものであったが、より明確で完備したものとなっている。ルートヴィヒ敬虔王は、この規則が法律と同等の拘束力をもって参事会の聖職者全員を律することを望んだ。司教座聖堂参事会員共同体が多様であるため、アーヘンの会則は、それらの共同体に私有物の徹底的な放棄などの義務を課してはいないが、共同生活の豊かさと服従の厳格さを推進しようと努めている。

司教座聖堂参事会員は、カロリング王朝時代に、徐々に共同生活をするようになった。

それは彼らが多少なりとも修道士の厳格さを模倣しようとする努力を意味していた。以上の伝統を踏まえた形で、11世紀には、一部の聖堂参事会員たちは完全な共同生活を送るようになっていた。

## (二) 律修参事会の指導理念としての「使徒的生活」

しかしながら、元々聖職者の集団である聖堂参事会員には各自に聖職禄が与えられていた。そのため、上述のような形で「律修参事会」への方向を目指す人々がいた一方で、参事会員の一部は世俗化し、規則にも、倫理的な責務にも、司牧の義務にすら従うことなく、世俗の人々と同様の「在俗」聖職者として生きるようになり、さらにはその一部には独身制を犯す司祭さえ出現した。

こうした傾向を憂慮した教会は厳しい改革運動を断行した。11世紀中葉には、ペトルス・ダミアニ (Petrus Damiani, 1007-72年) や、後にかの改革教皇グレゴリウス七世 (Gregorius VII, 在位1073-85年) となるヒルデブランド (Hildebrand, 1020-85年) のような熱心な改革派の人々が、アーヘン教会会議の路線のさらに先へと進もうとした。彼らには、アーヘン教会会議の規則が未だ個人的な住居と財産の私有を許容していたことが不満であった。彼らは、聖職者が原始教会の使徒たちに倣って、いかなるものも私有することなく共有する「使徒的完徳」の生活を送ること、すなわち聖職者たちが修道士と同様に完全な律修生活を送ることを求めた。そうした文脈の中で『私有財産保有の律修聖職者を駁す』と題して発せられたペトルス・ダミアニによるメッセージの中に、律修的な聖堂参事会の指導理念としての「使徒的生活」のイメージを伺い知ることができる。

『使徒言行録』は、エルサレムの初期共同体の私利私欲を捨て兄弟愛に満ちた生活を描写したすぐ後に、「使徒たちは、大いなる力をもって主イエスの復活を証しし、皆、人々から非常に好意を持たれていた」(4:33) と述べている。このことは、「個人的にはまったく物を所有しないがゆえに、すべてを共有し、一切の現世的富の恩恵も受けない使徒たちだけが、布教の任務に適している」ことをはっきりと示すためではなかったか、とペトルス・ダミアニは述べている<sup>\*18</sup>。さらに、ペトルス・ダミアニは以下のように述べる。

旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と命じられた。こう『マルコによる福音書』は言う (6:8-9)。というのも、私有財産を持たない者だけが布教の任務にふさわしいからである。……中略……あらゆる邪魔物から自由になった軽装備の兵士 *expediti* のように、彼らは自らの美徳と聖霊の剣だけを武器にして、主のために、悪徳や悪魔と闘うのである<sup>\*19</sup>。

ヴィケールはここに、「[魂の管理=布教活動]を直接的に準備するものとして、使徒たちの質素で規律正しい共同生活を提示するという新しい事実<sup>\*20</sup>」を見て取る。つまり聖堂参事会員たちにとって「使徒的生活」が意味するところは、修道士たちにとってのそれとは異なっていた。【2】(一)節で見たように、修道士が自らの生活の起源として見ていた

「使徒的生活」とは、単純に私有財産の放棄としての清貧にもとづく共同生活を意味していた。そして「隠修士」という標語のもとに、さらなる孤独、祈り、禁欲を求める「完全な修道生活」が理解されていた。しかし、グレゴリウス改革派の律修参事会員は、本来的に聖職者であるので、彼らにとって「使徒的生活」は、聖職者の任務としての司牧と宣教の基礎としての意味を帯び、彼らの説教活動に説得力を与えるための模範としての「清貧」の生活として位置づけられるのである。

### (三) 修道士、聖職者、律修参事会員

律修参事会の出現に伴い、修道士、聖職者、律修参事会員の間で、「使徒的生活」としての資格におけるそれぞれの生活の優劣に関する論争が展開された。律修参事会員の生活様式は、実質的には伝統的な修道士とほとんど変わらぬものとなっていたがゆえに、それぞれの「独自性・特殊性の強調は、文学の上での問題だった<sup>\*21</sup>」とも言えるが、かなり熾烈な論争が展開した。ヴィケールによれば「こうした論争は、歴史的には、使徒の模倣に関して、一方では、修道士たちが千年来与えてきた解釈を修正し、他方では、在俗聖職者たちによる解釈を排斥することを狙ったものであった。そして、この論争は最後には、真の使徒の模倣は規律の遵守を伴った共同生活にあるのか、「魂の管理＝布教活動」にあるのか、あるいはその両者の並立にあるのかという問いかけにいたる<sup>\*22</sup>」こととなった。

いわゆるグレゴリウス改革の機運のもとでの修道士および律修参事会員の進出は、在俗の聖職者にとっては一定の脅威であったことであろう。在俗聖職者たちは、修道士や律修参事会員に対して、「修道士の職務は人を教化することではなく、涙することである」というヒエロニムスの言葉などを引き合いに出して、修道士であれ律修聖職者であれ、修道会に所属する者は伝統的に布教活動に従事することは禁じられていた、と主張する。

これに対して、修道士および聖堂参事会員の側は、在俗聖職者が「使徒的生活」を自称するとすれば「説教し、洗礼を行なうがゆえに、聖職者の中でもっとも不純な者が使徒の生活を実践していると言わなければならない」といった論調で反論する。この「不純」という表現は、グレゴリウス改革の中で、世俗化した聖職者に対して向けられた非難に通じるものである。修道士と律修参事会員は、「使徒的生活」とは自分たちが目指すように、使徒たちの美德を実践することにある、と主張する。あとは律修参事会員と修道士との関係であるが、律修参事会員は修道士に対して、自分たちが本来的に聖職者であるがゆえに「使徒性」という点でより優位にある、と主張した。

### (四) 律修参事会のモデルとしてのプレモントレ会

私有財産の放棄も含む形で、修道士の生活を完全に取り込んだ「律修参事会」のモデルとして、12世紀に成立したプレモントレ会を挙げることができる。

プレモントレ会の創立者クサンテンのノルベルトゥス (Norbertus, 1082頃-1132年) は身分の高い貴族の聡明な息子であり、若くしてクサンテンのザンクト・ヴィクトル聖堂参事会員となった。「ダマスクスを前にしたパウロの体験とも比較し得るような特別な<sup>\*23</sup>」回心の体験をした後、1115年4月17日にケルン大司教から司祭に叙階された。ノルベルトゥ

スは、自らの回心の経験をもとに「福音的・使徒的生活」の理想をめざして参事会を改革しようと試みたが、同僚たちの無理解のため不成功に終わった。

そこでノルベルトゥスは隠修士となり、自らの回心の理想を巡回説教者としての生活を通して実現しようとした。その結果、12世紀における巡回説教者特有の困難に出会うこととなる。それは、ほとんど後述するロベルトゥスと同じような困難であった。

ノルベルトゥスは、教会の最高権威である教皇ゲラシウス二世（Gelasius II, 1118-19年在位）に指導と認可を求めた。その後彼はランの司教バルトロミーの命により、ランにおいて再度司教座聖堂参事会の改革を試みたが再び不成功に終わる。結局、司教もノルベルトゥスも既存の参事会の改革は断念し、ノルベルトゥスはラン近郊の荒れ野プレモントレに隠遁し、1121年同地で同志とともに修道誓願を立て、新たな修道会プレモントレ会を創立した。この共同体は隠修士生活と参事会員の生活様式とを結合したものである。1126年2月16日、ノルベルトゥスは教皇ホノリウス二世（Honorius II, 1124-30年在位）からプレモントレ会を承認する大勅書を受けた。その後ノルベルトゥスがマクデブルク大司教に任命された結果、会はドイツ東部からポーランドに至るまでの広大な地域に新しい修道院を設立することが可能となった。また、この会の活発な宣教活動によって会の司牧的な面が特に強調された。

プレモントレ会は聖職者が志向する修道生活の指針である『聖アウグスティヌス修道規則』を自らの規則としたが、この規則を具体化して時代の状況に適合させていくために編まれた「規約」を通して、ノルベルトゥスとその後継者は会の組織化を図っている。従来の「司教座聖堂参事会」は司教のもとに各司教座において独立していた。これに対して、ノルベルトゥスは「司教座聖堂参事会員によって形成された個々の共同体を統合し、そうした共同体に伝統的な修道会のような構造を付与しよう<sup>\*21</sup>」とした。その組織化に際してはシトー会がモデルとされていた。

フランクによれば「ノルベルトゥスの巡回説教者としての活動、彼がもともと参事会員だったこと、そして彼が隠修制的運動にかかわったことは、この新たな修道会共同体にも刻印を<sup>\*25</sup>」残したとしており、ほどなくして修道会の中には二つの傾向が見られるようになった。すなわち、「観想的・禁欲的傾向と禁欲的・司牧的傾向の二つである」。この二つの傾向を反映して、プレモントレ会は地域によって若干異なる歩みを辿った。すなわち、フランスではシトー会型の「修道会」的な方向を示して、司教の裁治権からの独立（免属）を志向したのに対して、現在のドイツやハンガリーにあたる東部地域では、司教のもとに「司教座聖堂参事会」的な方向を示した<sup>\*26</sup>。

### 【3】 民衆による宗教運動と「使徒的生活」

#### （一） 民衆における隠修士運動

上述、11世紀の「隠修士運動」が示した傾向は、12世紀に至ってさらに顕著なものとなる。12世紀は、一般信徒たちを中心とする民衆の宗教運動の高まりの時代として知られている。こうした運動は、基本的にはこれまで述べてきた11世紀における修道士、律修参事会員の「隠修士運動」の延長線上にあり、これと並行するものであった。

しかしながら、こうした11世紀以来の流れの延長としての理解に加えて、12世紀は中世の社会全体が大きく変化する時代であったことにも留意する必要がある。それまでの社会は農業生産と土地とに基礎を置く封建社会であった。しかし、農業生産が安定して経済が発展した結果、都市を中心に商工業が発達した。その結果、社会全体が都市化し貨幣経済が農村にまで浸透する、という社会変革がおこったのである。かつては身分の上下差こそあったものの、農業と土地所有に基盤を置いた安定した社会生活があった。これに対して新たに出現した都市的な社会においては、商工業の台頭に伴い、経済的に力を蓄え都市貴族へと上昇してゆく階層と、没落して極貧のうちに流浪の民となる人々とが分離した。

こうした社会変動の結果、人々の信仰生活も大きく変化する。従来のベネディクトゥス型の修道院は農村を基盤としており、そこで農業労働と一部宣教活動に従事していた。彼らの生活は、農業と封建的な社会構造とに結びついていた。これに対して都市は、古来のベネディクトゥス型修道共同体にとっては把握の対象外であった。しかし、この都市住民こそが新たな宗教的要求の担い手となった。特にイタリア中部とフランス南部において、貧富を問わず都市住民たちは自分たちの直面する状況に即した宗教的形態を求めた。

その結果、都市市民を中心とする民衆もまた、隠修士運動の新たな担い手となった。しかし、彼らの新しい宗教心を反映して、彼らの理解する「使徒的生活」の意味も従来とは異なったものとなる。従来の隠修士的改革運動における「使徒的生活」とは、修道生活の理念を徹底させることを意味していた。具体的には、たとえばベネディクトゥスの『戒律』の厳守であったり、聖堂参事会員が「律修」生活を送り、聖職者としての宣教的使命を修道生活に結びつける、という方向を意味していた。これに対して、民衆によるこの新しい宗教運動は、直接福音書を規範とするものであった。

都市出身の一般信徒で「隠修士運動」に身を投じた人々は、特に上述の階層分化の結果、成功して富裕となった層から現れた。「彼らは今こそ豊かな余裕ある生活の中にあるものの、かつての同胞でありながら現在みじめな状態に落ち込んでいる人々と、明日は同じ運命に陥るかもしれなかった。また中には、不正な手段で富を蓄え、良心の不安に耐えられないでいる者もあった。だが一部には、社会的な上昇気流に乗ってさらに世俗の榮達を望みつつも、その立身出世の虚しさを悟って、宗教的榮光に思いを致す者もあった<sup>\*27</sup>」。最終的には異端とされる巡回説教者ワルデス (Petrus Waldes) も、「托鉢修道会」の草分けの一人となるアッシジのフランシスコ (Fransiscus Assisiensis, 1181/82-1226年) も、共に社会的出自としてはそうしたタイプの人々に属していた。

つまり、彼らは決して無学文盲の徒ではなかったが、専門的に神学の教育を受けたわけではない、という層の人々であった。彼らには聖書、特に福音書を直接読んでこれに接するだけの知的レディネスがあった。しかし、彼らは神学的な教育を受けたわけではなく、その点ではいわば「素人」であった。その「素人」の目をもって、彼らは福音書を直接自らの靈性の源泉としたのであった。

## (二) 巡回説教——正統と異端との狭間

### (a) 民衆的巡回説教者の場合

このような都市市民出身で「隠修士運動」に身を投じた人々の多くは巡回説教者となり、

間もなく出現する「托鉢修道会」の先駆者となった。上述した社会的背景から考えると、彼らのうちには心情的には現代のいわゆる「社会派（左派）」的なキリスト者と通底するものがあつた、と想像してもさほど誤り（時代錯誤）ではないように思われる。

ともあれ、彼らは聖書、特に福音書にもとづいて、使徒的情熱をもって説教を試みた。彼らの厳格な真の清貧にもとづいた生活は、彼らの言葉に説得力を与え、民衆たちにも、また貴族たちの間にも支持者が現れた。

彼らの「福音書主義」には、「正統」とも「異端」ともなりうる両義性、すなわち「聖書とイエスの生涯とに、先入見なしに身一つで回帰<sup>\*28</sup>」し、伝統的枠組による制度や慣例に囚われることのない「純粋なキリスト教」を目指す靈性の体現者として描くことも、「聖書との媒介なしの邂逅は、得手勝手な釈義という帰結を、また自由でしばしば饒舌な素人説教という帰結を、もたらした<sup>\*29</sup>」と評することも可能な両義性が孕まれていた。

聖職者たちや伝統的な修道士たちにとっては、基本的に彼らの清貧に徹した生き方そのものが自分たちに対する批判として受け止められ得た。巡回説教者の側が実際に伝統的修道院や教会位階制度を敵視して、意図してこれを攻撃するならば、それは直ちに反教會的・異端的な運動となる。また、聖職者たちにとっては、巡回説教者の説教行為そのものが自分たちの職分を侵すものであつた。聖職者たちは彼ら巡回説教者に対して、説教する権限は、聖職者、それも本来的には司教に限定されている、として彼らの行為を非難した。また、彼らの生活様式が、先に引用したように、「放浪修道者 *girovagum*」を非難し修道士に定住を義務づけるベネディクトゥスの『戒律』に対する明白な違反と映つたため、伝統的なベネディクト会系の修道士たちは彼らを放浪乞食として非難した。

聖職者たちおよび伝統的な修道士側からのこうした敵意と警戒の環境のもとで、彼らは真正の靈性と異端との狭間の微妙なところを歩むことになる。ただし、そうした「民衆説教者」が実際に異端的な方向に向つたか否かについては、個人と地域によって差があり、複雑な様相を呈していた。

#### (b) 学識ある隠修士の場合

しかしながら、巡回説教者として遍歴する隠修士は、そのような都市の民衆出身の人々のみではなかつた。隠修士たちの中には、前述のプレモンレ会の創始者ノルベルトゥスや、後述するフォントヴロー修道院の創始者アルブリッセルのロベルトゥスのように司教や大修道院長になりうるような高い学識を備え、事実後に司教となつたり修道院を創設するような人物もいた。このような人々はベネディクトゥス型修道制のあり方に満ち足りず、敢えて地位と名誉とを捨て、大規模修道院から離脱して、隠修士として巡回説教者としての生活を送つたのである。

修道院はけっして俗世から完全に切り離されてはいたわけではない<sup>\*30</sup>。多くの修道士、とりわけ修道院の上長は、俗世からのさまざまな要求に直面していた。その要求とは、具体的には寄進（創設）者の特権である。王、司教、貴族が自らの領地内に創設した修道院では、寄進（創設）者は修道院に多くのことを求める権利を有していた。創設者とその親戚を埋葬し、魂の救済を保証するために祈る、という宗教的な役割の他にも、修道院で晩年を過ごしたり、死の直前に修道士となつて修道院に入ることを受け入れた。9世紀までは、領主自身が院長になることも稀ではなく、親戚を院長に据えることは普通に行われて

いた。また長子以外の子供たちを受け入れる「扶養施設」としての機能も期待されていた。近代以降、こうした実態を示した修道院は「私有修道院」と呼ばれた。そうした「私有修道院」の実態とまではゆかぬまでも、修道院に寄進などの恩恵を施す世俗の者には当然一定の特権が認められていた。他方、修道院の側も、そうした特権と引き替えに自分たちに対する保護を求めるため、進んで王をはじめとする世俗の有力者に接近したがる傾向があった。

隠修士の生活は、そうした意味での俗世からの分離——自由——を意味していた。11世紀の隠修士運動が叙任権闘争で知られるグレゴリウス改革と軌を一にする、とされるのはこの点にある、と言える。隠修士運動が修道院における寄進者の特権からの自由を求める「私有修道院」的体制との闘いであったのと同じく、グレゴリウス改革は教会における寄進者の特権からの自由を求める「私有教会」的体制との闘いを意味していたからである。

遍歴の説教活動とフォントヴロー修道院の創立によって知られる隠修士、アルブリッセルのロベルトゥス (Robertus de Arbrissello, 1116年没) の足跡が、そうした背景を理解するための一例をなしている。杉崎泰一郎は、近年発見された伝記の一部を検討することによって、そうしたロベルトゥス像とその社会的背景とを明らかにしている<sup>\*31</sup>。

ロベルトゥスの青年期については不詳であるが、司祭に叙階された後パリで遊学していた1088/89年に、レンヌ司教シルヴェステル (1093年没) の聘を受け、彼は司教のもとで司祭長 archipresbyter として4年間、グレゴリウス改革の推進に尽力した。シルヴェステル司教の死後、ロベルトゥスは隠修士としての生活を基本としながら、彼を慕って集まった弟子たちのために、ロエ (1096年) とフォントヴロー (1101年) に修道院を建てた。しかし彼自身は結局自らが築いた修道院を後にして隠修士として遍歴の生活を送った。

1096年という年は、教皇ウルバヌス二世によってロエ修道院が正式に認可されると共に、ロベルトゥスには説教する許可が与えられている。フランクは、放浪の巡回説教者として「使徒に倣う」ことは、「当時特に異端的サークルの中で広く見られた」とした上で、教皇から正式の認可を受けたロベルトゥスを、「教会への抗議を含んでいる異端者の説教に対する答え」としてこれに対抗すべく任命を受けた「正統教会側の巡回説教」者として位置づけている<sup>\*32</sup>。

しかし、ロベルトゥス自身をめぐる事情はそれほど単純ではなかった。杉崎によれば、「高位聖職者や保守的な修道士たちは、ロベルトゥスの司牧的熱意を認めつつも既存の修道規則の使用や司教の監督下に入ることを要求し、極端な清貧の生活や苦行と、聖職者の品位を損なう言動とを危険視して、警告を発した<sup>\*33</sup>」。他方、民衆の方では「定住の枠を打ち破って乞食のような姿で村や町を遍歴するロベルトゥスの姿を愛し、彼を慕って説教を聞き、その後を追いかけ、移葬の際には奇跡を願って柩に群がるほどの熱狂を示した<sup>\*34</sup>」と言う。

つまり、元々高い地位と名誉に与りうる立場にあった隠修士にしても、彼らが放浪の巡回説教者として活動することによって、民衆からは多大な支持と尊敬とを集める一方で、高位聖職者たちからは警戒され、「穏健化路線を強いられていった<sup>\*35</sup>」のである。

フォントヴロー修道院は男女併存修道院であったが、多くの貴族の女性が修道女として入会するようになった。結局、ロベルトゥスはフォントヴロー修道院を二人の貴婦人、す

なわち領主の未亡人エルザンドと、ロエ修道院寄進者の姪であるペトロニユに委ね、フォントヴローは貴族的な女子修道院となった。杉崎はロベルトゥスの『伝記』を、院長となったペトロニユが「創立者ロベルトゥスの「正統的」な側面のみを伝えるとともに、フォントヴロー修道院の保守化と権力委譲の正当性を知らしめようとした<sup>\*36</sup>」意図のもとに記させたものとして分析している。

その上で杉崎は、「遍歴説教を行いながら修道院の生計をたてることは当時としては困難であった。加えて托鉢をもとめて遍歴することに対する嫌悪感は当時の修道士たちの間できわめて強く、ロベルトゥスの時代の西欧の経済は遍歴説教者の托鉢活動を養うほどには十分に成熟しておらず、修道院の生計は貴族からの寄進に頼らざるをえなかった<sup>\*37</sup>」と記して、11世紀末から12世紀初頭の隠修士運動の背景と限界とを示している。

#### 【4】 結び——托鉢修道会出现の前夜

以上、11世紀末から12世紀初頭の隠修士運動における「使徒的生活」の意味について概観してきた。

修道士たちは、カッシアヌス・ベネディクトゥスの伝統を踏まえて、自分たちの生活は『使徒言行録』が記述している「すべてを放棄した」、つまり私有財産の放棄という意味での清貧にもとづく共同生活という意味での「使徒的生活」の継承である、との自己理解をもち、「隠修士の生活」は、一層の孤独、祈り、禁欲を通して「より高度の観想」を求める、という意味での「完全な修道生活」を意味していた。律修参事会の伝統においては、「使徒的生活」に聖職者の任務としての司牧と宣教の基礎としての意味を込め、彼らの説教活動に説得力を与えるための模範としての「清貧」の生活として位置づけている。最後に、都市市民出身の民衆的な宗教運動における隠修士たちにおいては、「使徒的生活」とは、福音書の教えに直接に即した生活を意味していた。

これらの宗教的運動は、修道制の歴史における次の時代の一大エポック、すなわち「托鉢修道会の成立」の「前夜」の状況を示すものであった。托鉢修道会は、これまで述べてきたような「清貧」「観想」「宣教」そして「福音的な生」という「使徒的生活」に対する解釈および要請をその土壌として、都市の発達とさらに進展することにより、「西欧の経済が遍歴説教者の托鉢活動を養うほどに十分に成熟」する条件が整ったとき、芽を吹くのである。托鉢修道会において、修道士、律修参事会、そして民衆たちが考えていた「使徒的生活」が総合された形で展開される。そして、托鉢修道士たちは、中世キリスト教社会の解体の危機——「正統」と「異端」との分裂傾向——を一身においてつなぎ止めることになるのである。

#### 【註】

\*1 杉崎泰一郎 「隠修士とその時代ーラ・グランド・シャルトルーズ修道院を中心にー」（上智大学中世思想研究所編『中世の修道制』、創文社、1991年所収、p.121-2）

\*2 Benedictus de Nursia, *Regula* 1. [ベネディクトゥス著、古田暁訳『戒律』【中世思想原典集成】第

五卷「後期ラテン教父」、平凡社、1993年、所収]

- \*3 Johannes Cassianus, *Collationum XXIV collectio*, coll. XVIII, PL, c. 1094B-1100A.
- \*4 M.-H. Vicaire, *LIMITATION DES APÔTRES. Moines, Chanoines et mendiants IV-XII siècles*, Les Editions Du Cerf, 1963 [M.-H. ヴィケール著、朝倉文市監訳『中世修道院の世界－使徒の模倣者たち－』、2004年、p.35-36]
- \*5 Johannes Cassianus, *op. cit.* coll. XVIII, 5 次註も含め訳文は岸ちづ子 「シトー創立と「使徒的生活」」(上智大学中世思想研究所編『中世の修道制』、創文社、1991年所収、p.151-2) をもとにした。
- \*6 Johannes Cassianus, *op. cit.* coll. XVIII, 6
- \*7 ヴィケール 前掲書、p.40
- \*8 1098年にモレームの修道院長であったロベルトゥスが、フランス東部の荒野シトーの地で、ベネディクトゥスの『戒律』の厳格な遵守、粗衣粗食による質素な生活、荒地の開墾などの肉体労働の重視により、ベネディクトゥス的な靈性の復興をめざして新たに創始した修道会。第三代修道院長ハルディングス (Hardingus 1109-33) は会の組織化に力をつくし、会則『愛の憲章 *Carta caritatis*』の起草に着手している。また、シトーの娘修道院であるクレルヴォーの院長ベルナルドゥス (1090-1153年) は各方面で活躍しており、シトー会の靈性を代表する人物として知られている。
- \*9 岸 前掲論文、p.146
- \*10 岸 前掲論文、p.158
- \*11 カルトゥジア会は、ケルンのブルーノが、グルノーブル郊外の人里離れた谷間シャルトル (カルトゥジア) の地を司教から与えられ、1084年に6名の仲間とともに創始した修道院を基盤とする修道会。第5代院長グイゴ (1109-1113在任) が『シャルトルズ修道院慣習律』を編纂して共同体の基本精神を明文化し、1176年に教皇アレクサンデル三世はシャルトルおよびこれに倣う一群の諸修道院を、カルトゥジア会という名の修道会として認可した。本文にあるように、修道士に個室を与えて、孤独の中での観想を重視する点に特色がある。
- \*12 K.S. Frank, *Geschichte des christlichen Monchtums*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1993 [K.S. フランク著、戸田聡訳『修道院の歴史 砂漠の隠者からテゼ共同体まで』、教文館、2002年、p.52]
- \*13 ヴィケール 前掲書、p.71-73参照
- \*14 Chrodegang de Metz, *Regula Canonicorum*, ヴィケール 前掲書、付録 p.171以下に邦訳 (梅津孝孝訳) が掲載されている。
- \*15 同第三章。前掲邦訳 p.228以下
- \*16 同第三章。前掲邦訳 p.186
- \*17 同第三章。前掲邦訳 p.228以下
- \*18 Petrus Damiani, *Contra clericos regulares proprietarios*, Op. XXIV, PL, 145c.488 B, 490 AB
- \*19 Petrus Damiani, *op. cit.* c.490 BC
- \*20 ヴィケール 前掲書、p.103
- \*21 フランク 前掲書、p.96
- \*22 ヴィケール 前掲書、p.107
- \*23 J. フィルハウス 「最初の律修参事会－プレモントレ会の創立をめぐる－」(上智大学中世思想研究所編『中世の修道制』、創文社、1991年所収、p.190)
- \*24 フィルハウス 前掲論文、p.198
- \*25 フランク 前掲書、p.92-3
- \*26 フィルハウス 前掲論文、p.199
- \*27 坂口昂吉 「フランシスコ会の創立をめぐる」(上智大学中世思想研究所編『中世の修道制』、創

文社、1991年所収 p.214)

\*28 フランク 前掲書、p.99-100

\*29 *ibid.*

\*30 たとえば、H-W. Goetz, *Menschen im Schatten der Kathedrale - Neuigkeiten aus dem Mittelalter: Wissenschaftliche Buchgesellschaft*, 1998, [H-W. ゲッツ著、津山拓也訳『中世の聖と俗 信仰と日常の交錯する空間』、八坂書房、2004] の第二章 (p.69～) においてそうした修道院と世俗世界との交渉関係の実態が紹介されている。

\*31 杉崎泰一郎 『12世紀の修道院と社会』、原書房、1999年、第三章 (p.224～)

\*32 フランク 前掲書、p.91

\*33 杉崎 前掲書、p.245

\*34 *ibid.*

\*35 杉崎 前掲書、p.224

\*36 杉崎 前掲書、p.245

\*37 *ibid.*

In Search of “the Life of the Apostle”  
—Anchorite Movement in 11 and 12 centuries

Naoki KUWABARA

From the eleventh century to the twelfth century, the Christendom of Europe was in the period of reformation. In the recent study, the existence of anchorite monks, who appeared at each place in Europe came to attract attention, as a background of this reformation, The anchorite monks regarded “life of the apostle” as their leading idea. The purpose of this article is to clarify how this “anchorite movement” reflects in the religious trends of 11 and 12 centuries.

By the tradition of Cassianus and Benedictus, the ascetic life was regarded as the succession of “the life of the apostle” that “abandoned all” — i.e. cohabitation based on the honest poverty that abandoned private property — that the book of the “*Acts.*” describes. “The life of the anchorite monk” meant “the complete religious life” in the meaning to seek higher contemplation through more degree of loneliness, prayer, and abstinence than usual religious monks.

The tradition of the *canonici regulares* gives a deep significance to “life of the apostle” as the basis of the pastoral and the missionary work as clergies. “The life of the apostle” is thought to be the model of the life of “the honest poverty” that makes their sermons persuasive.

Finally, in the anchorite people in the religious movement of the people from the city-citizen, “the life of the apostle” meant the life that accorded with the teaching of the Gospel directly.

These religious movements showed the situation of “the previous night” of the coming big epoch in the history of the asceticism, namely “the formation of the mendicantes”. The basis of the activity of the mendicantes is their interpretation for “honest poverty” “contemplation” “missionary work” and “evangelical life” that are the interpretations and the requests for “the life of the apostle”.